



ばあ
日
場
あ

ママをいきかう人たちのバラバラシンケン物語

2013.11 創刊号

断らないソフト救急のあるべき道

院長 崔 秀賢

信頼関係を作る場でありたい

副院長 蓑島 豪智

新任の医師にきく、それぞれのいわくら病院

崔 炯仁 医師 岡元 宗平 医師 上野 幸枝 医師

地元企業とのコラボレーション

いきいきいわくら × BRUGGE 京都洛北

医療法人 稲門会

いわくら病院

断らない ソフト救急の あるべき道



白衣を ぬぐという 決断

私は20年程前から白衣を着るのをやめています。白衣を着るといふ事が医師と心を病める方たちの立ち位置をはつきりと線引きし、同じ視点に立つことへの妨げとなる、その象徴のように思えたからです。私は医者でありますが、医者である前に人間として、辛いことを病める方たちと共有できる人間でありたいとも思っています。その為、私はまず白衣を脱ぐことから始めました。

病院では、いつも私がラフな格好をしているもので、新人のスタッフなどは私が医者かどうか分から

ないこともありますが、心を病める方たちから「あんな、こんないのちやうか?」「無理したらあかんぞ」なんて言ってもらえることもあります。一方的に医師やスタッフが病める方に何かを与えているのではなくて、心を病める方たちも我々にいろいろなことを与えてくれる。そんな関係をとても嬉しく思っています。

地域のネットワーク と開放医療

いわくら病院には精神科の病棟、急性期対応の断酒会病棟、一般急性期治療病棟があります。断酒会病棟の特徴についてのべます。夕方になると5〜15人程が7時〜9時の地域例会に出かけていきます。帰ってくるのはだいたい10時ぐらいになり、それから晩ご飯を食べます。多い人は3ヶ月間の入院中に40回位行つて帰ってくる。それが、地域の断酒会とつながるトレーニングなんです。

地域の断酒会といわくら病院との間にネットワークができており、地域のクリニックとのネットワークもできています。つまり、一人の心を病める方を色んな人たちが多職種で見ているのです。

一般急性期治療病棟は昨年、面会、地域の患者会、クリニックの人や外来のかた、デイケアの人など色々な人が出入りして一日平均50人ぐらいが病棟の中に訪ねてきます。

相当ハードで、男性4、5人がかりでなければ押さえることができない様な患者様も、いわくら病院で

は開放病棟で入院できます。いわくら病院の医療と支えている人と入院中の人、家族とがその文化を共有できているんです。

悪ければくられるかも知れない、悪ければ鍵をかけられるかも知れない。でも、午前2時間、午後2時間とか、朝6時〜夜の11時とかよくなれば、24時間開放へと変わっていくのをみなさん大体知っているんです。

だから暴れて保護室に入っている、あの人は良くなってきた、また開放処遇に移れることをお互い思っているんです。だから、そんなに暴れている人のそばで将棋をしたり、トランプしたりよもやま話をしたりしていますので、他所でお話するとき、いわくら病院の急性期病棟は、すこく穏やかで和やかにしているといます。このことは長年にわたって築き上げられたものです。

精神科病院は閉じ込める場所ではない

いわくら病院では平成25年10月1日より365日24時間の救急受け入れを始めました。(原則)保護室が空いている時(現在、京都市内で精神科の救急受け入れをしてくれる病院は宇治の二つの病院(宇治おうばく病院と洛南病院)しかありません。地方都市と言っても京都はかなり大きな街です。救急入院が必要な患者様や、そのご家族にとつて、家から遠い病院へ行くというのは心身ともに大変な負担となります。いわくら病院では左京区、北区、上京区、



院長 崔 秀賢 Sai Syuken

中京区の4地域を中心に患者様が救急の際に宇治まで行かなくても済むように、保護室が置いてある時は救急受け入れに対応していきたいと思っています。これからは、いわくら病院が北部地域の救急受け入れの拠点になっていければと思っています。

スーパー救急というのは強制入院を意味します。強制入院の場合、患者様は病院に入った途端に2重3重に鍵をかけられ、自由の無い状態での入院生活を送ります。鍵を掛けて外の社会と強制的に隔離されたり、自由を拘束されるということとは、病める方にとって大変な心の痛みです。唯でさえ病気がかり、心も身体も傷ついて病院に入院したのに、更に病院で心を傷つけられてしまう。そんな経験をしてしまったら、一度病気が良くなっても社会に出たら、もう二度と病院には戻りたくないと思ってしまうのが普通です。そして、次に病気が再発したときに治療が遅れ、また救急入院となっ

てしまう。いわくら病院ではこの負の連鎖を断ち切りたいと考えています。

いわくら病院の精神科の治療に対する考え方は、病気に対し初期の段階で対処し、とことん悪くなる前に治療していきたいということです。近年、マイケアや訪問看護、医師による往診などを積極的にに行っています。このような私どもの取り組みは、かなり一般社会にも知って戴けるようになってきたと感じています。これを私どもはソフト救急と呼んでいます。

皆様に知っていただきたいことは、精神科病院は閉じ込める場所ではないということです。病気が良くなれば社会に帰って行く、また困ったら病院に来る。そんな当たり前のことが、いわくら病院だけでなく、どんとんと全国に広がって行って欲しい。それが私の願いです。

24HOURS

情報誌

場あ

創刊について

このたび、当病院のことをより多くの皆さんに知っていただくため、情報誌「場あ」を発刊することとなりました。

「場あ」という言葉は、ここを歩きかう心を病める方たち、ご家族、地域の方々、職員にとって、人が生きていくのに必要なさまざまな繋がりが生まれるところというニュアンスを含んでいます。

私たちの思い描く精神医療は、綺麗事ではなく、人間臭く、人と人が出会い、心を病める方の困難と向き合うことです。

ここで生まれるたくさんのお話。私たちはこの地が、常に未来へと繋がる開かれた扉を持つ「場あ」であり続けることを願い、この情報誌を「場あ」と命名しています。

日々生まれている物語を見ていただき、私たちの取り組みを知っていただければ幸いです。



個性を尊重する 開放医療

かつて、社会の中で過剰にこ
くいを病院の中に閉じ込めて
社会から隔離して治療することが
精神科の病院の成り立ちでした。

閉鎖病棟で治療をしている中で、
患者さんにとって必要なことは、隔離

することではなく、自由で上下関係のない環境を形成す
ることが治療に良い効果があるのではないかとという発
想でやってきたことが、開放医療という考え方とそれを
実現するための地域をも含む、関係者の連携システムの
構築です。

病院という舞台の中で行われることなので、いくら気
を付けていても、構造としてどうしても治療する人と治
療を受けられる人という上下関係がどこかに生まれて
しまうことがあります。けれどその環境の中で出来うる
限り患者さんの目線でもとらえることがその人にとって
良いことなのかを考えて、また自分達だけで考えるので
はなく、「ご本人やご家族の方、地域の方とやり取りをし
ながら答えを探し求め続けたい」と思っています。

精神病に対して偏見が渦巻いていた時代の中、いわく
ら病院は開放医療ということを手掛かりに、患者さんの
目線に立ち、病院を利用される方にとって良いことをし
ようという姿勢を始めた草分け的な病院のひとつであ
ると思っています。



INTERVIEW to



Dr. Minoshima

信頼関係を 作る場でありたい

いわくら病院へは京都というかなり広い地域から緊
急の患者さんが入院のために来られるのは確かです。
ですが、救急で入院が必要になることが続いていると
はどういったことなのでしょうか。

例えば東京のような大都市なら新しく発病する方
が途切れないということもあり得るのですが、京都
程のそれほど大きくない規模の街の場合、治療を受け
られた後で、何らかのかたちで治療が途切れてしまっ
て、病状が悪くなるまでアプローチが十分にできない
ままに、残念ながらまた救急で入院されるということが
少なからず起こっているのではないかと思います。だ
とすれば、治療につながる最初の段階で強制的な入院
治療になるということはある意味仕方ないかもしれま
せんが、同じ方が救急の入院を繰り返すということは
なくしていきたいのです。

最初の出会いは、強制入院という望まない形になっ
たかもしれないけれど、それをきっかけにいわくら病院
はどういう所か？どういったような治療をするのか？
ということをお患者さんに分かって戴き、信頼関係を作
ることができれば、病状が悪くなり最終的に救急対応
が必要になる前の早めの段階で、患者さん自身が進ん
で治療を受けて戴けることが起こり得ると思っていま
す。

実際、病状の重い方に多く入院していただいている
当院の急性期治療病棟においても自発的な入院が75%
と高い割合を占めています。救急はとても大切な役割
ですが、それだけでなく、むしろ、そうならないように

する関係作りや治療環境の提供を時間がかかっても地道に行っていくことが患者さんにとって大切なのではないのでしょうか。

生活の場に行ってみてわかること

ある方は精神科の病状があつて入院されたのですが、一方で腰椎の病気で歩けない状態でした。身体治療はお隣の病院でして戴き、いわくから病院に戻ってきて歩行器でリハビリを続け、病棟内では手摺を使ったり杖を使って歩けるようになっておられました。私としては退院が出来ると感じて再掛けをしていたのですが、その方は「こんでもない」と仰っていました。

その方は、以前から「ちょっと依存的なもの」の言い方や頼み方をされるころがあつたので、またそんなところなのかな？と思ひ退院して戴く方向に進めていました。その中で、実際に「自宅に何って」「本人と」「家族とヘルパーさん」を交えて退院に向けて何が出来るのか話し合いをする場を持ちました。その方の「自宅に何ってみますか」「自宅は本当に急な坂の上にはつんどある、バス停からも遠く結構な坂道を上って行かなければならない所で、家の中にはたくさん物が置かれていて、その中で生活されるのは困難であることが予想されました。その方は、「この現実を踏まえて今の様な状態で家に帰るのは」「とんでもない」と言われていたのです。「このとき私は、病院の中ではリハビリはこの程度で十分と言える場合であっても、実際にご本人がそれで不自由なく生活出来るのか？」ということとは別の話で、実際に生活の場に行つて、その人が何を仰つている

のかを自分の目で見てみないと分からないことがあると強く感じました。誰が主人公なのか？ということをしつかりと考え、病者としての側面だけでなく生活者としての側面にも現場に出て目を向けないといけないのだと思ひ知らされました。

次のステップへ

これからも開放医療はもちろん維持していきませんが、それは決していわくら病院の目指すゴールではないと思つています。病院で治療を受けて退院された方が退院後、また病状が悪くなつて戻つて来られて入院されて、また症状だけを治められて退院しての単なる繰り返しは嫌だなと私は思ひます。夢や希望、楽しみ、仲間、やりがい、働き甲斐、生き甲斐、そういった生きるエネルギー、自尊につながるものが得られない環境の中に放り込まれたままであれば、最終的に、「生きる苦悩」が「病状」として結実せざるをえないのではないかと懸うのです。現在いわくら病院には、そのようなパターンを断ち切るための二つの試みとして就労支援があります。少しずつでも、生き甲斐といった面での応援を進めていきたいと思つています。

一方で、いわくら病院には専門性をもったスタッフたちがいますので、それらの専門性を活かして患者さんをこれまで以上に応援出来るよ

うになっていきたいと願つています。いわくら病院で働いてこられた先輩たちは開放医療という一つの素晴らしい形を作り上げてこられました。しかし、「開放医療」を通して大切に考えてきたことに思いを至らせれば、その次の展開がありえるはずだと思つています。

今、私たちは、次のステップを模索していかなければならないと思つています。もちろん、今まで培ってきたいわくら病院の良いところをこれからも続けて活かして行きつつ、それらを土台に次のステップにあゆむ勇氣を持ちたいと思つています。



副院長 蓼島 豪智 Minoshima Taketomo

VOICES OF OUR NEW DOCTORS

新任医師にきく それぞれのいわくら病院

鍵に頼らない病院と 共生に誇りを持つ地域

いわくら病院の病棟で働き始めて、鍵の力に頼らないで看護の力で患者さんをみよう、といういわくらの文化の力のようなものを感じています。基本的に鍵が開いていて、治療上必要な人だけ行動を制限するという方法と、基本的に鍵が閉まっていて可能な人だけ外出できるという方法の違いから生まれるメリットは、想像していた以上に大きな、と思いまし



医師 崔 炯仁 Choi Hyungin

た。これまで勤務してきた病院とは違うスタイルのことがたくさんあるので、少しずつ勉強していきたいと思えます。

また、地域と病院の話し合いの席に参加させていただいたのですが、その席で地域の方が「私達は開放医療の発祥の地である岩倉という土地に誇りを持っている」とおっしゃいました。患者さんが社会に出ていくのを援助したい病院と受け入れに不安を感じる地域の対決姿勢のようなものは避けられないと想っていた私には、その方の発言がとても衝撃的でした。20年以上前に激しい対立から始まった話し合いだとお聞きしましたが、長い対話の歴史の中でむしろ病院も一緒にやって地域づくりをしていきましたよという話を聞いてびっくりした結果なのかな、と思いました。

この事からは精神科医療だけではなくて、人間と人間のコミュニケーションの可能性を感じますね。



いわくら病院はスタッフの方々のプロ意識が高く、加えて、元気で活気があることに驚きました。病院の雰囲気といえますが、スタッフや患者さんの関係が風通しが良く気に入っています。医療においても、患者さんの自主性を尊重して非常に先進的な取り組みだと感じています。

いわくら病院のスタッフはリスフをしつかりと意識しながらも、あくまで患者さんの自主性や今後の生活を考え、開放度や生活の範囲を決め、希望を持って患者さんと関わっていると思います。

また職種の垣根を越えスタッフみんなが、ある程度自由に試行錯誤をして医療に携わっています。違った考え方をもち

ながらも、互いに尊重しあいながら、各々の角度から患者さんにとってより良い医療を目指していると思います。

今後自分の中では精神療法的な関わり方を少しでも工夫していけたらなと思っています。特に慢性期の統合失調症の方を深く抱える事ができたり、急性期の方にうまく届くような言葉を生み出せるような精神療法をやっていききたいなと思います。

患者さんもスタッフも 自主性を重んじ 活き活きできる病院



医師 岡元 宗平 Okamoto Shuhei



「礼儀」「挨拶」 「良心」により 築かれる 人間関係

いわくら病院に来て、まず感じたのは「すべての人に対する礼儀」「挨拶」「それぞれの良心」によって築かれる人間関係がとても大切にされているということです。

実際、病院の中を歩いていますと、患者さんも病院で働いている人達も、誰かに会った時にはお互い笑顔でちゃんと挨拶をしておられるのを目にします。みんなが小さい頃に二度は習ったこと「挨拶」や「人を大切にすること」を当たり前のように行う、それは「医療だけではなく「人と人の関係作り」の基本だとあらためて感じます。いわくら病院には、そういった昔ながらのあたたかい空気があると感じます。

精神科というのは、その患者さんの、病気の「ある時点」だけではなく、「生活のすべて」さらには「人生の質」に関わる人が多いです。そのため、いろいろな側面に対して広く包括的な視点を持ち、自分ならどういいう風に対応してもらおうのいいかを書きつつ、深く関わっていきたいと思います。自分ならではの想いも大切にしつつ、しっかりと患者さんと向き合いたいです。



医師 上野 幸枝 Ueno Yukie



いきいき・いわくら

就労継続支援B型施設



Sweets & Bread
BRUGGE
京都 洛北

地元企業とのコラボレーション

京都市内で移動ワゴン車で評判のスイーツとパンのお店「ブルージュ洛北様」は全国ネットのテレビ番組でも取り上げられ、本店へは遠方からもお客様がいられています。日々の仕事はとても忙しくされていますが、いわくら病院「いきいき・いわくら」の就労継続支援に参加していただいています。



写真上段/
月2回「いきいき・いわくら」にパンを提供しています。

写真下段・右/
販売時には長い列が出来るほど人気のブルーージュ

写真下段・中/
本店と同じパンを提供しています。

写真下段・左/
かわいい看板が目印です。

私達は今年の春頃から「いきいき・いわくら」さんの就労継続支援に関わっています。

月に2回パンをお渡ししまして、施設で袋詰めをして、実際にお客様に販売していただいています。

お菓子をを通じて「人と人との架け橋」になれたら・・・そんな思いがブルージュ洛北の原点です。

いわくら病院さんと取り組んでいる就労支援は「人と人との架け橋」の二つの形だと思っています。

私達のパンやスイーツを販売していただき、患者さんが社会に戻るきっかけとなれば嬉しいです。



グランシエラ
勝西 脩さん

編集後記



「場あ」において、編集者「エアウィンド」の方々の新たなご縁をいただきました。掛け合いの中で勧めていただいたコンセプトが、連携していただいている機関の方だけでなく、利用していただいている方自身の目線で、当院での取組をご紹介できるものをつくることでした。大切にしたい思いを改めて形にして教えていただいたありがとうございます。本誌を手にとられた方が、当院の利用を考えておられる方に直接「一緒にそのまま本誌を見ていただいて、こんなところみたいだよと語り合っていたら、材料になれば幸いです。ここでは私たちの今をお届けさせていただきます。ぜひ、忌憚のないご意見、ご感想をいただきたいです。そうした掛け合いこそ、気付き、学ばせていただく大切な機会になると考えています。よろしくお願いたします。(M)

表紙および挿絵紹介

今アール・ブリュット(正規の美術教育を受けていない人の作品が世界で注目を浴びています)。

広報誌の表紙や中の挿絵は、当院で長期療養中の方が、OTプログラムの中で描かれた作品です。

作者が描くものを真摯に見つめる目は少年のように純粹で、正確に写し取り、迫力あるタッチの絵が毎回出来あがります。天賦の才能については、それがどう出ているのか分からないところが楽しみでもあります。

高齢にならなれて体力的に衰えながらも、その才能にはますますの磨きがかかり、人の秘めたる能力の素晴らしさを感じさせてもらっています。

いわくら病院 作業療法室

医療法人 稲門会

いわくら病院

日本医療機能評価機構認定病院

〒606-0017 京都市左京区岩倉上蔵町01 ☎ 075-711-2171 FAX 075-722-7898

<http://www.tourmonkai.net>